

認知的構造化欲求と構造化能力が自尊心と他者の受容に及ぼす影響

浦 光博

広島大学総合科学部

The influence of need and ability to achieve cognitive structuring on self-esteem and acceptance of others

Mitsuhiro URA

Department of Behavioral Sciences, Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract:

When is individuals' high self-esteem compatible with their high acceptance of others and when not? The purpose of this study was to explore the answer to these questions. Ninety-seven undergraduates completed a questionnaire which consists of scales for acceptance of new and old friends, which have three sub-scales; trust, impression and closeness, Need for Cognitive Structuring (NCS) scale, and Ability to Achieve Cognitive Structure(AACS) scale. Consistent with the predictions, only under low NCS and high AACS condition, individuals' high self-esteem was compatible with high trust in a new friend, but for the case of old friends, the interaction effect of AACS and NCS on trust was not found. Implication and limitation of this study were discussed.

Keywords: Need for cognitive structuring, Ability to achieve cognitive structure, self-esteem, acceptance of others.

問 題

自己への高い評価と他者の受容とは、どのような場合に両立し、どのような場合に両立しないのだろうか。従来、人は内集団の他者に対しては外集団の他者に対してよりも高い評価を与えること(e.g. Hogg & Abrams, 1988)、親密な他者に対しては、自己に対するものと同様の擁護バイアスが働くのに対して、親密でない他者に対してはそのようなバイアスが働かないこと(Aron & Aron, 1997; Sedikides, Campbell, Reeder & Eliot, 1998)などが報告されている。さらに、自己に対する肯定的評価が他者への肯定的関心につながり、それが他者からのサポートを仲介して自己の適応を促進するという主張(Taylor & Brown, 1988)、自己と他者がよりプロトタイプ的なカテゴリーによってカテゴリー化されることが、肯定的な自己評価につながるという主張(Turner, 1987)を考えあわせれば、人は自己評価の維持・高揚のために、自己と同じカテゴリーに入る他者を受容し、そうではない他者に対しては拒否的な態度を示すということになる。言い換えれば、自己と同じカテゴリーに属すると判断される他者を受容することと、自己評価の維持・高揚とは両立しやすいけれども、自己とは異なったカテゴリーに属する他者の受容は、自己評価の維持・高揚とは両立しにくいというこ

とである。

では、人はいったいどれくらいの範囲の他者を自己と同様のカテゴリーに属すると判断するのだろうか。この範囲が広ければ、より多くの他者の受容と自己評価の維持・高揚とが両立しやすいと予測される。逆にこの範囲が狭ければ、自己評価の維持・高揚と両立させつつ受容できる他者の数は少ないということになろう。本研究では、この範囲を人が情報処理に際して利用することのできる情報の多様性として捉える。多様な情報を適切に処理できる場合には、それができない場合と比較して、より多様性に富む他者を受容しつつ自己評価を維持・高揚させることが可能となろう。

認知的構造化と利用可能な情報の範囲

多様な情報の処理に関連する概念として認知的構造化がある。認知的構造化とは、「抽象的な心的表象(先行経験の単純化された一般化、たとえば、スキーマのプロトタイプ、スクリプト、態度、ステレオタイプ)の生成と利用」と定義されている(Neuberg & Newsom, 1993)。これら抽象的な表象による情報処理は、具体的で個別的な情報による情報処理よりも自動化が進んでおり、すばやくなされる。また、そのような情報処理を行うことによって、一貫性のない情報には注意が向きにくくなる。

このような認知的構造化は個人の自己評価にどのような影響を及ぼすのだろうか。選択的で偏った認知は自己についての肯定的幻想を生じさせる(Taylor & Brown, 1988)とするならば、認知的構造化の進展は、高い自己評価につながるだろう。しかしながら、このことは、認知的構造化への志向性の高さが、直接的に自己に対する肯定的な評価につながることを意味しない。この点についての正確な理解のためには、Bar-Talら(Bar-Tal, 1994; Bar-Tal, Kishon-Rabin & Takak, 1997)による、認知的構造化欲求と認知的構造化能力という2つの概念の区別に基づいて検討する必要がある。

まず認知的構造化欲求とは、文字どおり、人がどの程度の認知的な構造化を求めているかを表す概念である。この認知的構造化欲求の高い個人は、抽象的な心的表象を用いて自己と環境を認識しようとする傾向が高い。しかし、この欲求の低い個人が抽象的な心的表象を必要としないというわけではない。環境内に存在する多種多様な情報を何ら抽象化することなく、個別的な情報のままに特定の判断を下したり意思決定を行ったりすることは不可能、もしくはきわめて困難なことに違いない。とするならば、認知的構造化欲求の高低はあくまでも、人が処理しようとする情報の多様性の程度を示すものであるということになる。

次に、認知的構造化能力とは、個人が自らの構造化欲求の水準に合った構造化をどの程度実現できるかを示すものである。構造化欲求の高い者にとっては、それは自らの既有知識にカテゴライズされない情報や既有知識と相容れない情報を避けたり、それらの情報を既存の認知構造にあうように組織化する能力である。また、構造化欲求の低い者にとっては、それは、すべての利用可能な情報を体系的に包摂する能力である。

構造化欲求と構造化能力との交互作用効果

以上の区別に基づいて考えれば、個人の自己評価と密接に関連するのは、認知的構造化欲求ではなく構造化能力であることが分かる。この能力の高い者は自らの欲求の水準に見合った構造化を実現することで自己についての肯定的な幻想の維持が可能となり、結果として自己評価が高まると予想できる。

また、構造化欲求の高低と構造化能力の高低とは自己評価に対して交互作用効果を及ぼすと考えることができる。まず構造化欲求も能力も高い場合には、自己評価は高く維持されるだろう。逆に、

構造化欲求が高く能力が低い場合には、構造化された認知を利用できないために肯定的幻想が生じにくいことと、認知的構造化という自らにとって望ましい状態を実現できないことの相乗効果によって、自己評価の低下は著しいものとなろう。一方、構造化欲求の低い個人の場合はどうだろうか。このような場合でも、構造化能力が高ければ、自己評価は高く保たれるだろう。しかし、構造化能力が低ければ、やはり認知的構造化を用いることができないことによる自己評価の低下が見られるだろう。しかしながら、望ましい状態と現実との乖離が少ないために、構造化欲求が高く能力が低い者と比較すると、自己評価の低下の程度は小さいであろう。

以上の検討に基づき、本研究では、個人の自己評価の指標として自尊心得点を用いて、以下の仮説を検討する。

仮説1：認知的構造化能力の高い個人はそれの低い個人と比較して自尊心得点が高いだろう。

仮説2：認知的構造化能力が低い個人の場合、認知的構造化欲求が高い者の方が、その低い者よりも、自尊心得点が低いだろう。

認知的構造化と他者の受容との関連

以上のような認知的構造化は他者の受容といかに関連するのだろうか。他者のような社会的刺激は一般に予測可能性が低い(Zajonc, 1980)。そのような他者への反応は、予測可能性の低い事態への耐性に強く依存するだろう。すなわち、この耐性が高い者は低い者と比較して、予測可能性の低さゆえに生じる他者への不安が低く、他者を受容することへの抵抗が少ないと予測できる。

この低予測可能性事態への耐性は、構造化欲求と構造化能力によって規定されると考えることができる。まず、構造化欲求の高い個人は低予測可能性事態への耐性が低い(cf. Webster & Kruglanski, 1994)。また、構造化欲求が低くても、そのための能力が低ければ低予測可能性事態への対応が不十分となるため、耐性は低いだろう。しかし、構造化欲求が低く構造化能力が高い個人は、低予測可能性事態における多様な情報をピースミールの的に処理しそれらを広く包摂しうる表象を形成できるため、そのような事態への耐性が高いだろう。したがって、このような個人は、他者を受容しようとする傾向が相対的に高くなると予測できる。

では、他の3群の人々は他者を受容しようとはしないのだろうか。対人関係の初期段階においては、他者一般に対する認知傾向がパートナーへの反応に及ぼす影響が大きいものに対して、対人関係がある程度進展した後では、個別的な関係に特有の認知傾向がパートナーへの反応に及ぼす影響が大きくなることが知られている(Pierce, et al., 1991)。とするならば、すでに近い関係にある他者の受容には、認知的構造化欲求と構造化能力の影響は及びにくく、いずれの群の個人間にもそのような他者の受容の程度に顕著な差は認められないであろう。以上の検討にもとづき、本研究では、知り合って間もない友人と、知り合ってかなりの期間が経過した友人それぞれに対する受容の程度について、次の仮説に基づいて検討する。

仮説3：知り合って間もない友人の受容に対しては、認知的構造化欲求と認知的構造化能力との交互作用効果が認められるだろう。すなわち、認知的構造化欲求が低く、認知的構造化能力の高い個人が、知り合って間もない友人に対して最も高い受容を示すだろう。

仮説4：知り合ってかなりの期間が経過した友人の受容に及ぼす、認知的構造化欲求と認知的構造化能力の影響は、知り合って間もない友人の受容に及ぼす影響よりも小さいだろう。

方 法

調査対象者 大学生97名(男子49名、女子48名)。全員が教養的教育の心理学の授業を受講している1年次生である。

測 度

認知的構造化欲求尺度(Need for Cognitive Structure Scale:以下NCS) : Bar-Tal(1994)による尺度(20項目、6件法)を翻訳して用いた。項目分析によって選択された18項目を用いた($\alpha=.85$)。用いられた項目の例を示すと、「予期しなかったことで私の日常が乱されると、とてもいらいらする」「ものごとは予測可能で確実であってほしい」「はっきりした答えのない問題に取り組むのは好きではない」などである。

認知的構造化能力尺度(Ability to Achieve Cognitive Structure Scale:以下AACCS) : Bar-Tal(1994)による尺度(24項目、6件法)を翻訳して用いた。項目分析によって選択された19項目を用いた($\alpha=.88$)。用いられた項目の例を示すと、「重要な決定の前に、それについてぐずぐずと考え続ける方ではない」「よく考えた後でも、重要な決定を下すべき時に、躊躇しがちだ(逆転項目)」「重要な決定をぎりぎり最後まで遅らせる傾向があり、決定後もそれについてあれこれ思い悩む(逆転項目)」などである。

自尊心尺度 : Rosenbergの自尊尺度の翻訳版(山本・松井・山成,1982)10項目を用いた($\alpha=.86$)。

友人の同定 : 大学新生に4月下旬の時点で、大学入学後知り合ったばかりの友人(新友人)と、大学入学以前からつきあっている親しい友人(旧友)をそれぞれ1名ずつあげるよう求めた。新友人については、「大学入学後比較的最近親しくなった学内の友人をひとり思い浮かべてください。この友人を以後、友人Aさんと呼びます。友人Aさんのイニシャルを記入してください」、旧友については、「長くつきあっている親しい友人(学内・学外を問わず)をひとり思い浮かべてください。この友人を以後友人Bさんと呼びます」とそれぞれ教示し、2種類の友人を同定させた。

なお、それぞれの友人とのつきあいの期間が、こちらの意図したとおりのものかどうかを確認するため、それぞれの友人の同定を求めた後、その友人と知り合ってから現在までの期間を1(1ヶ月未満)、2(1ヶ月~2ヶ月)、3(2ヶ月~3ヶ月)、4(3ヶ月~6ヶ月)、5(6ヶ月~1年)、6(1年以上)の6段階で回答するよう求めた。新友人とのつきあいの期間として2、5、6を選択した者がそれぞれ1名ずついたため、これら3名は分析対象から除外した。また旧友とのつきあい期間としては、5を選択した者が1名であり、他の被調査者はすべて6を選択していた。したがって、分析対象となった被調査者にとって新友人はすべて知り合ってから1ヶ月未満の他者であり、旧友はすべて知り合ってから少なくとも6ヶ月以上は経過した他者である。

友人の受容 : 新友人と旧友それぞれに対する被調査者の受容の程度を、印象、親密感、信頼の3つの下位尺度で評定するよう求めた。それぞれの下位尺度についての教示と項目は次のとおりである。印象については、「友人A(B)さんの人物印象についてお尋ねします」という教示に続いて、「1. 親しみやすいという感じが」「2. 好ましいという感じが」「3. 友人として長くつきあえるという感じが」の3項目、親密感については「友人A(B)さんとの関連性についてお尋ねします」という教示に続いて「1. 強い結びつきを感じる事が」「2. お互いの気持ちを共有する事が」「3. 考え方や価値観が似ていると感ずることが」「4. お互いに理解し合っていると感ずることが」の4項目、信頼については「友人A(B)さんに対するあなたの信頼感についてお尋ねします」という教示に続いて「1. 頼りになるという思いは」「2. 裏切られるかもしれないという思いは(逆転項目)」「3. あなたに対して誠実であるという思いは」「4. 信頼できるという思いは」の4項目である。これらの

項目に対して、「全くない(1点)」から「非常にある(7点)」までの7段階で評定するよう求めた。

受容に関する11項目について新友人と旧友それぞれで探索的因子分析(主因子解を経てバリマックス回転)を行ったところ、いずれの友人においても3因子解が得られた。新友人については、第1因子が親密感についての4項目によって、第2因子が印象についての3項目によって、第3因子が信頼についての4項目によってそれぞれ構成されていた。また、旧友については、第1因子が親密感についての4項目によって、第2因子が信頼性についての4項目によって、第3因子が印象についての3項目によってそれぞれ構成されていた。

また、それぞれの下次元ごとの内的整合性は、印象については新友人で $\alpha=.84$ 、旧友で $\alpha=.80$ 、親密感については、新友人で $\alpha=.83$ 、旧友で $\alpha=.83$ 、信頼については、新友人で $\alpha=.74$ 、旧友で $\alpha=.78$ と、いずれも十分な水準にあると判断された。

結 果

尺度得点間の0次相関、平均、標準偏差をTable 1に示した。印象、親密感、信頼のそれぞれにおいて、新友人と旧友との間に差があるかについて対応のあるt検定を行ったところ、いずれの得点においても旧友に対しての方が新友人に対してよりも有意に高かった(印象： $t(96) = 4.88, p < .001$ ；親密感： $t(96) = 8.82, p < .001$ ；信頼： $t(96) = 4.84, p < .001$)。

Table 1 Simple statistics of and zero-order correlation coefficients between study variables.

	Mean	SD	Correlation coefficients								
			NCS	AACS	SE	INF	CNF	TNF	IOF	COF	
NCS	58.39	12.06									
AACS	59.95	13.61	-.26**								
SE	31.97	7.59	-.18	.59**							
INF	17.03	2.94	-.09	.10	.14						
CNF	18.47	3.54	.04	.17	.03	.60***					
TNF	21.01	3.64	-.14	.14	.06	.65***	.59***				
IOF	18.52	2.52	-.01	.12	.07	.36***	.33***	.21*			
COF	22.22	4.21	.02	.18*	.11	.14	.32***	.24**	.41***		
TOF	23.13	4.02	-.08	.23*	.17	.27**	.27**	.35***	.48***	.55***	

Note. NCS = need for cognitive structure; AACS = ability to achieve cognitive structure; SE = self-esteem; INF = impression of a new friend; CNF = closeness with a new friend; TNF = trust in a new friend; IOF = impression of an old friend; COF = closeness with an old friend; TOF = trust in an old friend.

* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$.

ついで、NCSとAACSが自尊心と新旧友の受容に及ぼす影響を検討するため、自尊心得点と受容に関する3得点を基準変数、NCS得点、AACS得点、ならびにこれらの交互作用項を説明変数として階層的重回帰分析を行った¹⁾。その結果をTable 2に示した。

¹⁾ この分析のためには、NCS得点とAACS得点とが相互に独立していることが望ましい。しかし本研究においては、Table 1に示したとおり、両尺度得点間の独立性は必ずしも高くなかった。そこで、両尺度で測定される変数の独立性を確保するため、2つの尺度得点をあわせてバリマックス回転による因子分析を行い、回帰法によって求めた因子得点をそれぞれの概念に対応する変数として用いた。なお、因子分析の結果は、AACS尺度を構成する項目のみからなる第1因子と、NCS尺度を構成する項目のみからなる第2因子とに分かれていた。

Table 2 Increments of R² in hierarchical multiple regression analyses on influence of NCS and AACS on Self-esteem and acceptance of new and old friends.

	SE	INF	CNF	TNF	IOF	COF	TOF
Step 1							
NCS,AACS	.35***	.02	.06*	.06	.02	.05	.05
Step 2							
NCS×AACS	.03*	.01	.00	.04*	.00	.00	.00

Note. NCS = need for cognitive structure; AACS = ability to achieve cognitive structure; SE=self-esteem; INF = impression of a new friend; CNF = closeness with a new friend; TNF = trust in a new friend; IOF = impression of an old friend; COF = closeness with an old friend; TOF = trust in an old friend.

* p < .05. ** p < .01. *** p < .001.

NCS、AACSと自尊心との関係

Table 1 に示されたとおり、AACS得点が自尊心得点と有意な正の相関を示している。これは、認知的構造化能力が高いほど自尊心得点が高いことを意味している。よって、仮説1は支持された。

さらに、階層的重回帰分析において交互作用項の投入によるR²の増分が有意であったため、交互作用効果の検討を行った(Figure 1)。Figure 1から、AACS得点が高い者よりもそれが低い者の方が、NCS得点による自尊心への回帰直線の傾きが大きいことが分かる。また、低AACS群の回帰直線は有意である(p < .05)のに対して、高AACS群の回帰直線は有意ではない。これは、認知的構造化能力が低い個人の場合、認知的構造化欲求が高い者の方が、その低い者よりも、自尊心得点が低いだろうとした仮説2を支持する結果である。

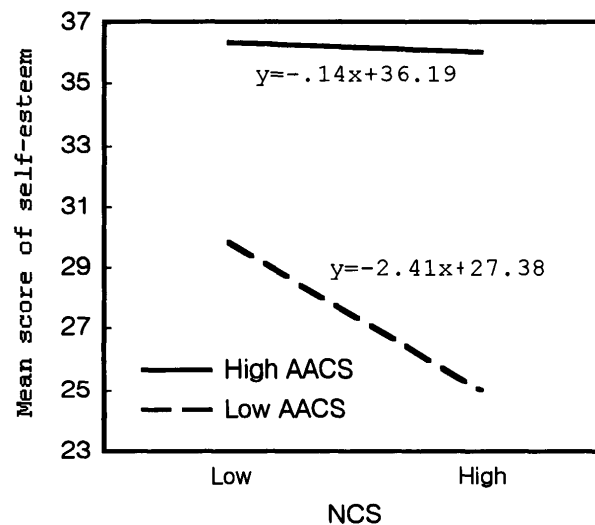


Figure 1. Plot of the relation between NCS and self-esteem in high versus low levels of AACS. "High" = mean+1SD, "Low" = mean-1SD.

NCS、AACSと新旧友の受容との関係

Table 2から明らかなように、新しい友人への信頼を基準変数とした場合、NSCとAACSとの交互作用項投入後の R^2 の増分が有意であった。そこで、交互作用効果の検討を行ったところ、高AACS群においてのみ、回帰直線の傾向きが有意であった ($p < .05$) (Figure 2)。Figure 2から、認知的構造化欲求が低く、認知的構造化能力の高い個人が、新たな友人に対して最も高い受容を示していることが分かる。これは、信頼について仮説3を支持する結果である。

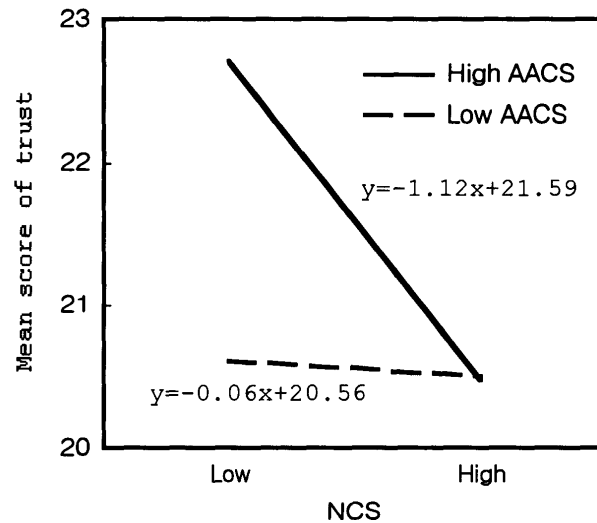


Figure 2. Plot of the relation between NCS and trust in a new friend in high versus low levels of AACS. "High" = mean+1SD, "Low" = mean-1SD.

Table 2 に、旧友の受容に及ぼすNCS得点とAACS得点の主効果、交互作用効果はいずれも有意ではないことが示されている。よって仮説4は支持されたとはいえる。

考 察

認知的構造化欲求が低い者はそれが高い者よりも、処理しようとする情報の多様性が高い。また、認知的構造化能力の高い者はそれが低い者よりも、自らが処理しようとする範囲の情報を的確に構造化する能力が高い。したがって、欲求が低く能力の高い者が、実際に利用できる情報の多様性が最も高いといえる。本研究で見いだされた交互作用効果は、構造化欲求が低く、構造化能力の高い者が、高い自尊心と関係性の初期段階にある他者への高い信頼をともに示すことを明らかにしている。この結果は、対人関係の初期段階にある他者を受容しようとする程度と自己評価との両立にとっては、どれくらい多様な情報が処理できるかの程度が大きな影響を及ぼすであろうとした予測を支持するものである。また、旧友の受容に関しては、構造化欲求、構造化能力ともに主効果も交互作用効果も示しておらず、すでに親密な関係にある他者を受容しようとする程度と自己評価との両

立にとっては、処理する情報の多様性の影響は及びにくいだろうとした予測が支持されたといえる。

ところで、本研究においては印象、親密感、信頼の3つの下次元で他者に対する受容を捉えた。このうち信頼に関して仮説3を支持する結果が得られた。この結果は、認知的構造化と他者の受容との関連に関してどのような示唆を与えるのだろうか。Rampel, Holmes, and Zanna(1985)によれば、信頼には他者の行動を予測することを可能にする機能があり、これは、二者間で生じた過去の出来事により強く影響されるという。このような信頼を、認知的構造化欲求が低く認知的構造化能力が高い個人は、知り合って最大1カ月しか経っていない友人に対して、他の群よりも高く評定していた。このことは、低欲求-高能力の個人は、共有する過去経験の少ないパートナーであっても、その行動の予測可能性が高いと認知していることを示唆している。

このことを言い換えれば、低欲求-高能力の個人は客観的には予測可能性が低いと思われる事態においても、広範なカテゴリーから得られる多様な情報をピースミール処理によって構造化し、主観的な予測可能性を高めることができるということになる。しかしこのような情報処理は一方で、個人にとって大きな努力を強いることにもなるため、低欲求-高能力の個人は強いストレスを感じるということにもなる(Bar-Tal, et al., 1997)。このようなストレス事態は個人の自己評価を不安定にし、ひいては自己評価の低下につながりかねない。にもかかわらず、本研究では最初の予測どおり、低欲求-高能力の個人においては、高い自己評価と他者への高い信頼とが両立していた。とするならば、低欲求-高能力の個人には、自らの情報処理スタイルによって引き起こされるストレス事態の悪影響を緩和するもうひとつのメカニズムが存在する可能性が示唆される。

Rusbult and Arriga (1997)によれば、パートナーに対する信頼は、パートナーの行動が好意的な動機に基づいていることを個人に推測させ、パートナーが個人の安寧を促進させる行動をとるだろうという確信をもたらすという。また中村・浦(2000)は、信頼とソーシャル・サポートとの相互関連を検討した研究において、関係性の初期段階にいるパートナーに対して高い信頼を認知する者は、そのパートナーからの将来のサポートへの期待が高くなることを明らかにしている。このようなソーシャル・サポートへの期待が自己評価の維持にとって重要な役割を演じることは、これまでに繰り返し確認されてきた(cf. Taylor & Brown, 1988)。このことが、低欲求-高能力者の自己評価の維持において重要な役割を演じている可能性が考えられる。

以上のように、本研究においては、関係性の初期段階にある他者に対する信頼と個人の高い自己評価とが、認知的構造化への欲求が低くその能力が高い個人において両立することが示された。しかしながら、本研究においては受容の他の2次元については、構造化欲求と構造化能力の交互作用効果は認められなかった。それがなぜなのかについては、多様な解釈があり得るだろうけれども、本研究の範囲の中で考え得る解釈をあげるならば、それは次のようなものである。

上述のように、信頼は二者関係の過去と将来を結ぶ重要な対人的特質である。言い換えれば、信頼とは、二者関係における過去経験によって規定される将来の予測可能性である。そして、認知的構造化欲求と認知的構造化能力との交互作用は、まさにこの予測可能性の形成に及ぼす過去経験の効果を調整する機能を持つと考えることができる。これに対して、印象の形成に過去経験の特質が大きく反映されるとは考えにくい。そのため、印象に対して構造化欲求と構造化能力の交互作用効果が認められなかったと推察することができる。一方、親密感に対しては、二者関係における過去経験が強く反映されることは十分に考えられる。しかしながら、親密感は過去経験によって形成された現在の二者関係の特質であり、必ずしも将来の予測可能性の程度を直接的に示すものではない。このことが親密感に対して欲求と能力の交互作用効果が認められなかった理由であると推察でき

る。

もちろん、これらはいくまでも推察の域を出るものではない。今後、パートナーに対する受容についてはより多面的な観点から捉えた検討が必要であることはいうまでもない。また、本研究は横断的なデザインに基づく調査研究であり、因果関係の同定に当たっては十分に慎重な配慮が必要であることも指摘しおかねばなるまい。縦断的な調査デザインならびに実験によって本研究の知見を確認することも、今後に残された重要な課題である。

引用文献

- Aron, A. & Aron, E. N. 1997 Self-expansion motivation and including other in the self. In S. Duck(Ed.), *Handbook of personal relationships: Theory, research, and intervention* (2nd ed., pp. 251-270). Wiley.
- Bar-Tal, Y. 1994 The effect on mundane decision-making of the need and ability to achieve cognitive structure. *European Journal of Personality*, **8**, 45-58.
- Bar-Tal, Y., Kishon-Rabin, L., & Tabak, N. 1997 The effect of need and ability to achieve cognitive structuring on cognitive structuring. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1158-1176.
- Hogg, M. A. & Abrams, D. 1988 *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. Routledge.
- 中村佳子・浦 光博 2000 ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について：対人関係の継続性の視点から. *社会心理学研究*, 15, 印刷中.
- Neuberg, S. L. & Newsom, J. T. 1993 Personal need for structure: Individual differences in the desire for simple structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 113-131.
- Rampel, J. K., Holmes, J. G. & Zanna, M. P. 1985 Trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 95-112.
- Rusbult, C. E. & Arriga, X. B. 1997 Interdependence theory. In S. Duck(Ed.), *Handbook of personal relationships: Theory, research, and intervention* (2nd ed., pp. 221-250). Wiley.
- Sedikides, C., Campbell, W. K., Reeder G. D., & Eliot, A. J. 1998 The self-serving bias in relational context. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 378-386.
- Taylor, S. E. & Brown, J. D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.
- Turner, J. C. 1987 *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Basil Blackwell.
- Webster, D. M. & Kruglanski, A. W. 1994 Individual differences in need for cognitive closure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 1049-1062.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, 30, 64-68.
- Zajonc, R. B. 1980 Compresence. In P. Pauls(Ed.), *Psychology of group influence* (pp.35-60). Hillsdale.